

# 「教育」と「環境」両問題の統合解決についての調査

Investigation about a solution of unification of "the education" and the "environment"  
both problem

**キーワード** 複合荒廃スパイラル、スパイラル逆転、リアル性の復権

## 1. 調査の目的

今日、我が国社会が早急に解決しなければならないものとして「教育」と「地球環境」の両問題がある。これら「教育」と「地球環境」はそのいずれもが、我々個人の生活、我が国の社会活動、さらに地球社会に対して、世代を超え地域を越えて複雑多岐にわたる強い作用を与えるものであろう。それは、民族さらには全世界の将来を決定する力を持っているといっても過言ではない。これら二つは人類文明の発足以来、互いに影響を及ぼし合いながら今日に至ったわけであるが、近世にいたって、教育がもたらした人類の社会活動（たとえば生産活動）を通じて両者が特異的且つ不幸な相互干渉を持つようになったといえよう。その結果、“人間の在り方”の忘失や“こころ”の消失をもたらし、いまや互いの悪化を助長するような“複合スパイラル荒廃”の危惧さえ覚える状況に立ち至ったといえよう。いまここで、科学者がその本来の先見性と英知を発揮して大所高所から問題解決の方向について提言しなければ、我が国はもとより地球と人類の将来に大きな危機が訪れることになると思われる次第である。

このような状況認識の下に、日本学術会議の「教育・環境問題特別委員会（和田 昭允 委員長）」は当未来工学研究所に委託し、広く有職者を対象に巡回インタビュー調査を行った。「教育」と「地球環境」の両者、特にそれらの相互作用について肌身に感じて本当に知っているのは、教育の現場にあって次世代の人達と常に接し、また、社会の諸事情、自然の緒現象の解析・解明に日夜当たっておられる方々であろう。その方々の問題解決への提言を伺い、整理し、国に対して適切な提言を行うことこそ、日本学術会議に課せられた任務であると考えたのである。21 世紀における日本の発展の基礎になると信ずる次第である。インタビューの結果は、伺ったご意見を「教育・環境問題特別委員会」において整理し、委員会の責任において、我が国の将来に重要な意味を持つ提言の基礎として活用することを目指した。また当未来工学研究所として報告書として編集し、広く学術会議会員の検討材料として提供した。

## 2. 調査研究成果概要

### 2.2. 調査方法

#### 1) 巡回インタビュー調査

「教育・環境問題特別委員会」委員より指名された有識者への巡回インタビュー調査を実施した。

実施有識者数：21人（実施者：表1参照）

#### 2) 調査結果の取りまとめ

巡回インタビュー調査結果を取りまとめ「教育・環境問題特別委員会」が作成する『勧告』並びに『調査報告書』作成の基礎資料とするための報告書を作成した。

表1. 質問票

<b>巡回インタビューにおける趣旨説明と御質問</b>	
<p>今日、我が国社会が早急に解決しなければならないものとして「教育」と「地球環境」の両問題があります。ここで云う「教育」と「地球環境」の意味については文末参照。これら「教育」と「地球環境」はそのいずれもが、我々個人の生活、我が国の社会活動、さらに地球社会に対して、世代を超え地域を越えて複雑多岐にわたる強い作用を与えるものであります。それは、民族さらには全世界の将来を決定する力を持っているといっても過言ではありません。これら二つは人類文明の発足以来、互いに影響を及ぼし合いながら今日に至ったわけですが、近世にいたって、教育がもたらした人類の社会活動（たとえば生産活動）を通じて両者が特異的且つ不幸な相互干渉を持つようになりました。その結果、“人間の在り方”の忘失や“こころ”の消失をもたらし、いまや互いの悪化を助長するような“複合スパイラル荒廃”の危惧さえ覚える状況になって参りました。いまここで、科学者がその本来の先見性と英知を發揮して大所高所から問題解決の方向について提言しなければ、我が国はもとより地球と人類の将来に大きな危機が訪れることになることと考える次第であります。</p> <p>この様な状況認識の下に、日本学術会議の「教育・環境問題特別委員会」は広く有識者の皆様のご意見を伺うべく、巡回インタビュー調査を行うことといたしました。</p>	
<b>質問</b>	<b>1. 上記課題について（教育と環境問題の統合解決という）のあなた様のお考え</b>
<b>質問</b>	<b>2. 環境問題についてのあなた様のお考え</b>
<b>質問</b>	<b>3. 教育問題についてのあなた様のお考え</b>
<b>【用語の説明】</b>	
<b>地球環境：</b>	人類及び生物の存在・生活に何らかの意味を持ち、人類及び生物の存在と関連を持つ外界。ここで云う「地球環境」は、狭い意味での自然環境（地球環境、生物多様性など）のみならず、社会的環境、文化的環境（政治、経済、道徳）などを広く包括するとする。いまやこれらは切り離せないものと考えられる。
<b>教育：</b>	個人の生得的資質を原点とした自然成長的な人間形成の過程を、望ましい方向に向かって目的意識的に統御する営み。学校教育、家庭教育、社会教育、生涯教育など広く考える。これらも、今回の目的のために切り離さず包括して考える方が素直であろう。

表2. 巡回面接調査実施者一覧（敬称略）

	氏名	所属・役職
1	飯田 弘之	静岡大学工学部情報学部情報科学科講師
2	市川 惇信	人事院 人事官
3	岩槻 邦男	立教大学理学部 教授
4	大橋 秀雄	工学院大学学長（第5部長）
5	勝俣 誠	明治学院大学 国際平和研究所 所長
6	河合 隼雄	国際日本文化研究センター所長
7	小松 郁夫	国立教育研究所学校経営研究室長
8	近藤 次郎	国際科学技術財団理事長
9	桜井 治彦	労働省産業医学総合研究所長
10	佐和 隆光	京都大学経済研究所教授
11	下井 泰典	東芝生産技術推進部環境保全センター長
12	住 明正	東京大学 教授 地球システムセンター長
13	曾野 綾子	作家・日本財団会長
14	竹内 啓	明治学院大学国際学部学部長
15	戸塚 績	江戸川大学社会学部環境情報学科 教授
16	藤田 紘一郎	東京医科歯科大学医学部医動物教室教授
17	松下 正明	東京都精神医学総合研究所長
18	松山 優治	東京水産大学 海洋環境学科 教授
19	宮崎 修行	国際基督教大学教養学部副部長教授
20	無藤 隆	お茶の水女子大学生活科学部教授
21	山折 哲雄	白鳳女子短期大学学長

注) 所属・役職は平成12年3月31日現在のものである。

## 2.2. 調査結果の概要

「教育」と「地球環境」両問題の統合解決という問題意識の背景には、環境問題と教育問題の複合荒廃スパイラルが進展しつつある現実がある。なぜならば環境問題と教育問題は別個の問題ではなく、実は根元で連結しているからである。それは人間性の本質に由来した問題で解決は決して容易ではない。対症療法的な取り扱いでは解決できない。そのような認識を踏まえた、解決策の創造が必要である。これは緊急の課題である。その解決策を探るべく特別委員会で討議し、かつ巡回インタビュー調査を実施した。その検討結果を本報告書において報告しつつ、先ず本調査に先立って考察した現状認識と、調査結果から抽出した展望、解決のための方策を以下に示す。

### 1. 現状認識

#### 1.1. 教育の問題点

教育は現在以下のような諸問題に直面している。

- ・ 人間関係の希薄化・荒廃（他人への配慮の喪失、家庭、地域社会の崩壊）
- ・ リアル性の喪失（情報化の不適切な受容、身近な自然環境の喪失）
- ・ 人生における価値観の矮小化
- ・ 人生の目的の喪失（開拓者精神の喪失）
- ・ 教育現場において「こころ」、「知恵」の問題の取り扱いが不十分であり知識偏重である

#### 1.2. 環境の問題点

地球環境問題は以下の問題点により、その解決が阻害されている。

- ・ 地球の有限性の不可視性
- ・ 大量生産・大量消費・大量廃棄・エネルギー多消費のライフスタイルの定着
- ・ 都市化の進展で身近な自然から疎外されていること
- ・ 核家族化の進展でライフステージが見えにくくなっている（次世代への配慮の欠如）

#### 1.3. 複合荒廃スパイラル

以上の教育と環境の問題点はお互いに原因となり結果となり荒廃を生み出している。これを「複合荒廃スパイラル」と命名する。

## 2. 展望

#### 2.1. 予測

何らかの対策を取らなければ、複合荒廃スパイラルはますます 21 世紀に進む。

その結果、資源枯渇、地球環境の極端な悪化がもたらされる。また人間関係の悪化が進

み、家族、地域社会の崩壊、地域紛争、戦争の頻発の暗澹たる未来が予測される。これを避ける事が科学技術の緊急の課題である。

## 2.2. 検討結果を踏まえた見解

教育も環境も、タイムラグのある問題である。そのような性質を踏まえた解決策でなければならない。先見性、人間性を持った科学技術が活躍するであろう。

そうした科学技術の成果を踏まえた教育内容の改訂が必要である。

## 3. 解決に向けての方策

以上の観点から、以下に教育と環境の抱える問題点を統合的に解決する枠組みを示す。

### 3.1. 問題点の正しい科学的理解...人間性の本質の正しい把握

問題点の正しい科学的理解を進めるための研究機会を設けること。

- ・新しい研究機関の改組・新設（例．文部省環境科学研究所、環境省環境研究所）
- ・既存の環境関連の大学・学部・学科の活用
- ・既存の科学館・博物館の活用

### 3.2. 科学技術と倫理観の融合...従来の価値観の転換

- ・問題点の正しい科学的理解に踏まえた倫理観の創出と普及
- ・そのような倫理観を科学技術に浸透せしめる必要性の認識
- ・浸透せしめるための教育プログラムの改訂

### 3.3. 上記の融合に基づいた、新しい学術・科学技術の創造

- ・総合科学技術会議において重要課題として位置付ける必要性
- ・新しい倫理観を備えた知的集団の育成
- ・新ライフスタイルの提唱
- ・新ライフスタイルのための、新産業の創出
- ・以上に向けた各分野の取り組みの開始：教育の転換に向けての以下の学問のあり方の検討等

人文・社会科学、法学、経済学、理学、工学、農学、医学・薬学

### 3.4.上記の諸問題に対処するための新しい国内・国際研究拠点の創設

- ・新しい研究機関の改組・新設（例．文部省環境科学研究所、環境省環境研究所）
- ・既存の環境関連の大学・学部・学科の活用
- ・既存の科学館・博物館の活用

### 3.5.スパイラルの逆転

以上の方策によって、複合荒廃スパイラルをストップさせ逆転せしめる。継続的改善のスパイラルへ向けて人類の新しい未来を切り拓くことが必要である。